# ちち・はは

小城ゆり子

## （１）父母の出会い

　亡くなった私の父は、書物を読み、文章を書くことが大好きな人だった。理科系の人で、文学的才能などはなかったのだが、後年、自分の人生を振り返って自叙伝(自分史)を書いていた。私は、遺されたその文章を読んで、わが家族の歴史を知ることができた。それを、母の語ったこと、自分の経験したこと、また若干の脚色を加えて、ここに書いてみようと思う。

昭和十一年（一九三六年）、日中戦争の始まる前の年、二月に二・二六事件があったのであるが、その三月、私の父と母との出会いがあった。
　父は新潟県の北の町、村上で女学校の教師をしていた。その許に、大学時代の友人、長谷川博が、訪ねてきた。父と違って、裕福な家庭に育った長谷川は、大学に残って物理学の研究をしていたのだが、春休みに村上の瀬波温泉に遊びにきたのである。父は、村上駅まで旧友を出迎えた。
「やあ、谷口くん」
「久しぶりだな、長谷川くん」
　大学を出て二年、卒業以来の再会だった。
「君の細君は、どうしたんだい？」と長谷川が父に聞く。
「あれか？　あれとは、別れた」
　父は、最初の妻と別れていた。
「あ、どうしてまた？」
「ぼくの貧乏が気に入らなかったんだな。自分から出て行ったよ。苦労を知らない医者の娘だからな」
「へええ」
「あれは、好きな男がいたんだな。それを、親たちがむりやりぼくとめあわせた。ぼくは、傷物を押し付けられたんだ」
　ずっと後になって、父は、私に、最初の妻は「処女でなかった」とひどいことを言った。が、周囲の話からすると、父が勉強ばかりして、新婚の妻をかえりみなかったので、妻は怒って出て行ったのだそうである。
「どうだい、女学校の教師は？　楽しいかい？」
「うん、楽しい。かわいらしい娘たちに囲まれて、天国にいるようだよ」
「そりゃ、よかった」
「ところで、今夜の宿だが」
「うん？」
「瀬波温泉にぼくの教え子の親たちがやっている旅館があるんだ。そこへ、まず君を案内しようと思う」
　教え子の古賀裕子は、瀬波の温泉旅館の次女であった。和泉屋旅館といって、この温泉地を開

いた人の始めた老舗である。裕子は、この三月に女学校を卒業したばかりである。
　村上駅から、歩いて、父は友人を和泉屋へ案内する。
　旅館に着いて、女将に挨拶する。
「私は、村上女学校の谷口ですが」
「まあ、先生」
「こちらは、私の友人で、長谷川博といいます。今晩、泊めていただきたくて。部屋はあいていますか？」
「はい、ちょうどよいお部屋がございます。先生には、裕子がたいへんお世話になりました。お礼にもうかがわず、失礼しましたが」
「いや、それは。裕子さんも、無事、卒業で、よかったですな」
「はい、それはもう。長女の聡子も、この春、東京の女高師を卒業しまして、今、家に帰っております」女高師というのは、女子高等師範学校のことで、東京と奈良にあり、東京のそれは現在のお茶の水女子大学になっている。
「ほう、そういうお嬢さんもいらしたんですか」
「はい、後で、裕子と二人、お部屋へうかがわせてもよろしいでしょうか？」
「ええ、どうぞ、どうぞ。いいなあ、聡明な娘さんがいて」父は頭のいい娘が大好きだった。先の妻は、勉強ばかりしている父に愛想をつかしたが、父は「共に学び、共に働く」女性が理想なのだった。
　部屋に案内されて、父と長谷川博とは、弁証法的唯物論の議論などしていた。この時代、社会主義思想は弾圧され、許されていなかったが、官憲には「弁証法的唯物論」など何のことかわからず、それが社会主義思想であるという認識がなかった。で、それをいいことに、彼らは大学で唯物論研究会などやっていたのだ。京都大学で、物理学を専攻していた仲間である。
　そこへ「ごめんくださいませ」と、この旅館の裕子と聡子がやってきた。
「あ、すみません、お話の最中でしたか」
「いや、いいんですよ。話はいつでもできるんです。妙齢のお嬢さんたちには、難しい話はぬきですね」
「お嬢さん方がいらっしゃるというんで、待っていたんですよ」
「まあ」ぽっと赤らむ聡子である。
「先生、これが私の姉です」と裕子が聡子を紹介した。
「ご姉妹とも、お美しいですね」と博が感嘆した。「ご両親も、お楽しみでしょう」
　聡子は、東京のモダンガールらしく、華やかな洋服に身を包んでいた。おしゃれさんなのである。博も、父も、ぽおーっとしてしまう。若者たちの出会いである。
「裕子さんも、聡子さんも、次は結婚ですね」
「私は、東京の服装学院へ行くことになっています」と年若の裕子が言う。「洋裁がやりたくて」
「洋裁か、いいなあ」和裁よりも洋裁、という時代が始まっていた。
「私は村松の女学校で働くことになっています」と聡子が言う。「女高師を出ましたので、義務

年限がありまして。でも、文科や理科を出た人たちは、就職先がないんです。私は家事科なので、男の人たちと競争しなくて済んで、女学生に栄養と料理を教えることになっています」
「ほおお、裕子さんは洋裁、お姉さんの聡子さんは、料理ですか」
「あら、私も、実は理科へ進みたかったんですよ。でも、点が足りなくて、第二志望の家事科にまわされて」
「そうですか。でも、栄養と料理を学んだ聡子さんをお嫁にもらう人は幸せだなあ。毎日、栄養いっぱいのおいしい食べ物にありつけるわけですからね」博はしきりに感心していた。
　その一方で、父のほうは、はにかんで、よく会話もできなかった。聡子に一目ぼれしていたのだ。
　村松町は、新潟県内だが、村上とは離れている。現在は隣の五泉市に吸収合併されている。そこの女学校に私の母、古賀聡子は就職したのである。村上からは通えないので、下宿した。そこへ、父から、何通も手紙が舞い込んだ。父は教え子の裕子から母の居所を聞いたのだ。裕子は、姉の住所など教えたくなかった。「先生は、お姉ちゃんのほうがお気に入りなんだわ」と思うと、悲しかった。女学生に人気のあった父である。裕子も秘かにあこがれていたのだ。それでも、叔母の裕子は、意地悪ではなかったから、姉の住所を教えたのだ。
「パパからどんどん、手紙が来るの。それが、読むと、けっこう面白い手紙なのよ」と母が後に言っていた。
「私も、たまには返事を出していたわね。そのうち、手紙で『結婚してください』って言われたの」
　夏休みに母は、村上に帰省し、和泉屋旅館の親たちに相談した。
「そうねえ。谷口先生は、帝大出だろ」と母親が言った。帝大とは、この場合、京都帝国大学のことである。京都大学の旧名である。
「帝大出なら、娘を嫁にやるに不足はないさ」と父親が言う。
「しかし、どうする？　村上から村松へは通えないよ。お前は、まだ義務年限が終わってないんだろ」
「それは、私が平日は村松にいて、日曜日にだけ村上に帰ってくればいいって、先生がおっしゃるの。一週間に一回、織姫と彦星みたいな七夕夫婦もいいもんだ、っておっしゃの」
「へええ、そうかい」
　冬休みに、母は父に連れられて、父の実家に行った。祖父はすでに亡くなり、新潟市近郊の実家には、祖母と伯母たちがいた。伯母は結婚もせず、小学校の教師をして、一家を養っていた。これ以前も、これ以後も、この伯母が谷口家を取り仕切っていた。父は長男だったけれど、伯母に学費を出してもらったので、頭が上がらないのだった。
　が、瀬波温泉の老舗旅館の娘と聞いて、伯母は喜んだ。金持ちの娘、というわけである。伯母は正直な人だった。以後、伯母と母とはしっくりいかず、よい関係にはなれなかったが。
　翌年の春、和泉屋旅館で、父母は式を挙げた。そして、母は父の指示通り、村松から土・日に村上の父の許に通い、楽しい新婚生活を続けた。だが、その年の夏、盧溝橋事件があり、日中戦争が始まった。若い二人の幸せに反して、時代は破滅に向って進み始めていた。

## （２）姉の誕生

　昭和十三年（一九三八年）春、父は、大学の恩師の紹介で、関西は奈良の中学校に転任することになった。無事、村松での義務年限の終わった母も、父と共に奈良へ行く。日中戦争の最中である。
「関西は私には合わなかったね」と後年、母は私に言った。「買い物一つにしても、関西では値切るのが普通なんだね。私は値切ることができなくて、バカにされて」母はつらい思いをした。
　それまでの何の不自由もない共働き生活から、専業主婦になった母は、貧乏教師の家計のやりくりに苦しんだ。もともと母は、貧乏の味など知らなかったのだ。和泉屋旅館のお嬢さんだった。
　こんなはずではなかった、と母は思う。実家が恋しい。瀬波に帰りたい……。そう思っていたら、首尾よく妊娠し、母は喜んで瀬波に帰った。初めての子供を産むため、という大義名分がたつ。
　母が帰ってきたので、祖母たちは、あわてた。
「お前、いいのかい？　旦那さまをほおっておいて。子供ができたって、産まれるのはまだ先のことじゃないかい」
「いいのよ、私、関西は嫌い」
「そんなことを言って。旦那さまに浮気でもされたら」
「大丈夫よ、あの人は。女よりも本が好きなんだから」妻を愛するよりも、難しい本ばかり読んでいる父だった。後年、父は私に言った「おれはもともと淡白なんだ」。
　昭和十四年（一九三九年）六月、母は、瀬波で、長女を産んだ。安産だった。
　手紙で、父に知らせる。「女の子でした。名前を付けてください」
「中学生が、ぼくの名前、英夫のひと、聡子のさとをとって、ひさ子と名づけてはどうかと言っています。しかし、ひらがなではなんだから、比佐子としよう」と父が手紙で名づけてきた。こうして、姉、比佐子が誕生した。
　瀬波の祖父母は、もちろん、初孫の比佐子をかわいがる。母、聡子にとって、何不自由ない生活が続いた。この楽しい生活を変えたくない。お宮参りが済んでも、母は奈良に帰ろうとしなかった。
　父も、あえて妻子を自分の許に呼ぼうとしなかった。淡白な父なのだ。それに、妻子のことより、父は戦時下の教育に悩んでいたのだった。

## （３）浦和で

日中戦争は泥沼化し、昭和十四年（一九三九年）九月にはドイツ軍がポーランドに侵攻し、ここに第二次世界大戦が始まった。

父は女学校でかわいらしい娘たちに物理を教え、幸せだったのであるが、女学校では実験用具が少なく、生徒の前で自分が実験して見せることはできても、生徒自身に実験をさせることができなくて、不満だったのだ。だから、奈良中学では生徒実験ができるかと思い、期待して転任したのだが、中学では、なるほど実験器具はそろっていたが、「生徒実験などやらなくていい」と校長にクギをさされた。「生徒実験などは遊びのようなもので、生徒がやかましく騒いで困る。入学試験に大切なのは、計算問題だから、それをしっかりやってくれればいい」と言われた。それでも、父は、なんとか生徒実験を始めたのだが、実験がものめずらしい生徒たちは、器具に触れたり、騒いだりして、遊んでいる。実験を楽しんでいる生徒たちの気持が父にはわからず、この子たちはいたずらばかりしている、校長の言う通りだ、と思ってしまった。で、がっかりして実験は止めた。

そればかりではなかった。中学では、受験勉強と軍事教練ばかりが重視されていた。父は軍事教練などできなかったが、それを教えている配属将校が軍隊の都合で出張したりすると、その代理をやらされた。で、形ばかり将校の格好をして、挙手の礼をし、出席をとって、「君たち、好きなことをやれ」と言って職員室に戻ると……子供たちは遊んでいると思いきや、くそまじめに駆け足行進の稽古をしている……という具合だった。

大正デモクラシーで育った父は、自由主義教育にあこがれて教師になったのだ。しかし、時代は変わっていた。奈良中学では、将来、将校になるための軍事教練と上級学校へ進学するための受験勉強ばかりが強制され、父の理想はかえりみられなかった。それで、父は悩んでいたのである。

理科の教師たちは、次々と教育現場を去って、軍需工場の研究室に就職していく。父の前任者がそうして去ったので、父はそのポストに就けたわけであるが、軍需工場の誘惑の手は、父にも及んで来た。教師などしているより、はるかに高額の給料がもらえるのだ。教育上の悩みと、軍需工場の誘惑の手……父はやすやすとその手に乗ってしまった。東京の軍需会社に転任が決まった。

そのことを瀬波にいる母に知らせた。

母も喜んで姉を抱いて上京し、東京の親戚の家に行き、そこから家捜しを始めた。私が大きくなってから、父は自分はマルクス主義者だと言っていたし、母はリベラリストだと自称していたが、そんな二人も大きな戦争の波に呑み込まれ、自分たちが何をしているかわからないのだった。

「浦和に家を見つけました」と母は、奈良の父に手紙で知らせた。春休みになって、父は学校を退職し、上京した。そこで、浦和での親子三人の暮らしが始まった。昭和十五年春のことである。

しかし、ずっと親子三人では暮らせなかった。まもなく、父は、会社の都合で、東北大の金属材

料研究所に派遣され、仙台に行かねばならなかった。仙台に行って、土・日に浦和の妻子の許に帰る、父の大好きな七夕夫婦生活がまた始まった。経済的にも恵まれ、一人っ子の比佐子姉はすくすくと育つ。
　とても幸せな生活なのに、父は「共に学び、共に働く」理想の夫婦になりたいのだった。乳離れした姉を子守りにまかせ、母に浦和の師範学校で働くようにいう。浦和女子師範では女高師出の母は、歓迎された。そして、共働き生活。ともに、お手伝いの子守りのほか、父の弟谷口望と母の弟古賀幸一郎の二人が同居して、それぞれ東京の学校へ通っていた。望叔父は電気の学校、幸一郎叔父は理科の専門学校である。母の妹である裕子叔母は、軍人と結婚していた。
　一方で戦況が拡大していた。
　昭和十六年(一九四一年)十二月、ついに日本軍がハワイ真珠湾を奇襲し、太平洋戦争が勃発した。
「あたしは無知で、アメリカと戦争するってどういうことか、考えてもわからなかったね」と母は私に語っている。「パパと違って、あたしは何も知らなかった。パパもあたしに戦争のことは何も話してくれなかったし……戦争反対って、うちの中でさえ、とてもそんな話のできる時代じゃなかった。弾圧も酷かったし、肝心の国民も皆、戦争の勝利に浮かれていたの。ちょっとでも戦争反対なんて言えなかったんだよ。パパが一人で悩んでいるって、あたしも知らなかった。ただ、そんなあたしも、幸一郎のことは、心配だった。戦争にとられるんじゃないかと……だから、理系の学校に進むように、どんな三流校でもいいから、とにかく文系ではなく、理系に進むように、と、口をすっぱくして言ったんだよ。自分の家族のことは心配だった。でも、それ以上、世の中のことは考えられなくて。自分の生活だけで精一杯だった」
　母は、学校の勤めと家事、育児で、疲れていた。疲れて、家事もお手伝いに任せ、すぐに比佐子と一緒になって寝てしまう。
　昭和十七年の夏……その頃、父は仙台から東京に転任して、浦和で暮らしていたのであるが……トマトをたくさん食べた比佐子は、夕方、ぐずぐず言っていた。母はそれを気にもとめず、そのまま寝てしまった。
　深夜、母がふと目を覚まし、「あっ！」と叫んだ。
「どうしたんだ、いったい？」父も目を覚ます。
「比佐子が」
「比佐子がどうした？」
　赤ん坊の比佐子は、まるで死んだように青ざめて、動かない。
思わず父は「死んだのか？」と言ってしまった。
「ええっ」母は泣き出した。
「医者だ！　医者だ！」父は叫ぶ。
「おい、みんな、起きろ！」
　父が大きな声を出したので、お手伝いも、二人の叔父も、起きてきた。狭い家の中である。
「望、氷を買いに行け！　幸一郎くん、ぼくと二人で医者を呼びに行こう！」
　真夜中に氷屋や医者をたたき起こす。

　医者は起きてきたが、今、看護婦を呼びに行くからと、なかなか来てくれなかった。父と幸一郎叔父とは先に帰って、比佐子の額を氷で冷やしていた。熱は４０度もあった。
　二時間ほどたって、やっと来た医者は、疫痢だと診断した。
「これは、病院に入院させなければダメですな」
　その朝、病院が開くとすぐに、父母は比佐子を連れて行き、入院させた。
　幸いにして、姉の疫痢は治った。
だが、母は「私、学校の勤めと比佐子の世話は両立しなくて……」と泣いた。
「そうか……」
さすがの父も、母が学校を辞めて専業主婦になることを承知した。お手伝いは家に帰した。

## （４）私の誕生

　日本は敗戦に向って進んでいた。
　昭和十八年（一九四三年）　二月、決戦標語「撃ちてし止まむ」が登場した。四月、山本五十六連合艦隊司令長官が戦死し、日本は決定的に敗北に向って進んだ。五月、アッツ島が壊滅し、六月、本土空襲がいよいよ現実となり、防空壕の整備強化が進められた。国民徴用令が改正施行され、女性も労働力として女子挺身隊が制度化された。
　文系の学生たちの徴兵猶予が停止され、学徒出陣が始まった十月、私は浦和病院の産婦人科で産まれた。
　姉は母の実家で産まれたし、後に妹は新潟市近郊の父の家で産まれるのだが、私だけは当時としては珍しく、病院で産まれた。きっと家に母子の世話のできる女手がなかったためであろう。安産だった。
「今度も女の子で、ごめんなさい」と言った母に、父は、
「よい、よい、男はつまらぬ」と小声で答えた。
　身体の弱い父は、徴兵検査で、第二乙種であった。そのためこれまで徴兵されずに済んだが、これから先のことを考えると、不安になるのだった。軍需工場に勤めている……もう一度教壇に立ちたい、と思う。しかし、もうこのとき、父は徴用令に縛られ、転職することが許されていなかった。
　当時、女の子の名前に、勝子と洋子とがはやっていた。戦争に勝つように、また太平洋の名にちなんで。
「この子の名前は勝子にしましょう」と母は提案したが、父は、
「いや、洋子にしてくれ」と答えた。
　戦争に勝つことを念じていた母と、戦争に反対だった父とは、考えが違っていた。
　戦時中で、物資も不足し、何かと不自由な毎日だったが、姉と私とはすくすく育っていた。
後年、母はよく浦和時代のことを私に語った。
「比佐子と洋子とは、姉妹でも性格が違っていたね。いうことをきかないから、便所に閉じ込めると、洋子はいつまでもえんえん泣いてばかりだったけれど、比佐子は、窓に向って、道を通る人に、『おじちゃん、助けてちょうだい！』って叫ぶんだよ。あたしはあわてて比佐子を便所から出したもんだよ。この子は難題にぶつかっても解決していける子だなって思ったよ。洋子はダメだけれど」
「比佐子って、人気者だったんだよ。お調子者なんだね。その頃は、お米も不足していて、うちも困っていたけれど、比佐子が『おにぎり作って』っていうから作ってやると、それを持って外に飛び出していくんだよ。またやってきて、また『おにぎり作って』っていうのでまた作ってやると、また飛び出して……そんなことを何回も繰り返すもんで、あたしもおかしいなと思って、外へ出てみると、比佐子が、近所の子供たちを一列に並ばせて、一個ずつおにぎりを配っているんだよ。あれには参ったね」
「その頃はどこでも鶏を飼っていたけれど、うちでも飼っていたんだよ。比佐子は『コッコち

ゃん』といってかわいがっていた。で、お客にごちそうする必要があったとき、あたしがその鶏を絞めて、水炊きにしたんだよ。それを、よせばいいのに、あたしったら比佐子に『これ、コッコちゃんのお肉だよ』って言っちゃたんだ。そうしたら、比佐子はその肉を食べようとしないで、いくら言っても食べないんだよ。あたしが心無いことを言ったばっかりに、比佐子は鶏肉を食べない子になっちゃたんだよ」

　姉は、七十歳を過ぎた今でも、鶏肉を食べることができない。

## （５）本土空襲

昭和十九年（一九四四年）三月、望が電気学校を卒業して郷里・新潟に帰ることになったので、父は、まだ五歳にもなっていなかった比佐子を彼に託し、新潟に疎開させた。米軍機の日本本土襲来を怖れて、田舎に縁故のある家ではどこでも子供を疎開させていた。

その怖れの通り、六月には米軍Ｂ２９が北九州を空襲し、マリアナ沖海戦が開始され、七月に日本軍のサイパン島守備隊が壊滅したため、日本本土は米軍機の爆撃圏内に入った。米軍の空襲が予想され、都市では学童集団疎開が実施された。万策尽きた日本軍は、最終手段、神風特別攻撃隊を出撃させる。

十一月になると、Ｂ２９による日本本土空襲が本格的に始まった。昭和二十年（一九四五年）Ｂ２９は連日のように日本の各都市を空襲した。硫黄島決戦で日本軍は敗北、三月には東京大空襲があり、沖縄戦が始まった。

四月十五日深夜、浦和が空襲された。そのとき、父はちょうど富山工場に出張中だった。幸一郎は兵役に就いていた。母と赤ん坊の私、二人っきりだったわけである。空襲警報に驚いた母は、非常持ち出しも何も身につけることができず、私をおぶって防空壕に飛び込んだ。何回も敵機が頭上を通過し、空襲が二時間も続いた。と、一機がざあーっと雨の降るような音をたてて、頭上を通過したと思うと、次の一機が頭の上をぐるぐる旋回している。まもなく敵機が去って、恐怖に震えながら防空壕から出てみると、近所に、火の手が大きくあがって、昼のように明るい。荷物を持ち出そうとするが、赤ん坊をおぶっているので、身動きがとれず、布団を布団包みに入れて廊下に出し……幸い、火事が消えたので、もうこれまでと観念し、すぐに新潟に逃げようと荷物を整理していたところへ、父が帰ってきた。

早く田舎に逃げようとせく母を、なだめ、父は王子の会社へ行った。こんなとき、男はしゃんとしていなければならないのだ。父は王子駅から歩いて行った。空襲にあって、駅前の市電の停留所も破壊され、コンクリート造りの交番も崩れ、内閣印刷局と王子製紙工場が焼け落ちて、付近の民家は一面に焼け野原であった。電柱が焼け落ちたり、傾いたり、電線が道に曲がりくねって横たわっていた。見覚えのある家が一軒も残っていないので、道がよくわからない。適当に歩いて会社に向う。道端に馬の骨が焼け残っていて、臭い。会社も焼けていた。父は自分たちももうどうなることかと思った。鉄筋コンクリート建ての研究所だけは焼けずに残っていたが。そこで、研究員はそれぞれ適当な現場に所属することになり、父は富山に行くことになった。しかし、その前に妻子を新潟に疎開させなければならない。もうこの戦争は勝つ見込みが全くなくなっていた。五月にはドイツ軍が無条件降伏する。

疎開の荷造りと発送がどうやら完了し、やっと新潟への汽車の切符を手に入れたのが五月二十五日だった。家の整理を済ませ、リュックサックの荷物が出来上がったのが、夜の九時。そのとき、空襲のサイレンが鳴った。あわてて防空壕に入る。頭上に雨の降るような音がして、焼夷弾がばら撒かれる。が、ちょっと離れた所だった。空襲が済んで、やれやれと胸をなでおろし、寝ようとしたが眠れず、翌朝の三時に起床して、最初の電車と汽車で一路、新潟へ向う。

親子は夕方、新潟に着き、父のすぐ下の弟、誠叔父の留守宅に泊まった。ところがなんという

ことか、この晩、新潟でも警戒警報が鳴った。が、新潟港に機雷が投下されただけだとわかり、一家は安堵して眠った。前の晩からほとんど寝てなかったのだ。
　翌朝、新潟市近郊の曽野木村の祖母の許へ行く。疎開していた比佐子が、父にじゃれついて、遊びまわった。疲れ果てていた父はここで一週間、静養し、六月五日、富山へ単身赴任した。信濃川にはまだ橋がなく、渡し船で新潟駅へ向う……川岸で、母と私たちがいつまでも手を振っていた。空襲ばかり続く日々、いつが最後の別れになるか、わからなかったのだ。実際に富山で父はまた空襲にあい、九死に一生を得たのである。
　富山空襲は、八月一日にあった。一機ずつ並んで来る敵機は、次々と二時間に渡って、焼夷弾攻撃を行った。父によると、富山市からかなり離れていて安全だった工場から見ると、まるで仕掛け花火のように美しく見えたそうだ。
　空襲は朝二時過ぎに済んだが、身体の弱い父は、連日の疲れで倒れてしまった。３９度８分の熱が出て、激しい下痢もした。回りの人たちが介抱してくれ、医者も呼んでくれたが、四日間はほとんど断食で、葛湯と春雨しか食べられなかった。五日目からおかゆが食べられるようになり、家族に連絡しなければと気もあせって、葉書を出した。
　母は、ラジオで富山空襲のことを聞き、早合点して、父の遺骨を拾いに富山まで行く決心をし、新潟駅まで行った。そのとき、ちょうど、父の葉書が家に着き、叔母がその葉書を持って新潟駅までかけつけ、富山行きを中止させた。家族は無事だった。

　新潟は、無事だっただろうか？　新潟は、大規模な空襲にはあわなかった。空襲は小規模だった。だが、それは、新潟が原爆投下目標になっていたからだった。
　七月にはアメリカが初の原爆実験に成功していた。そして、八月六日、広島に最初の原爆（新型爆弾）が投下され、広島市内は未曾有の惨状と化した。八日にソ連が参戦し、九日に長崎に第二発目の原爆が投下された。
　後に、私は母から聞いた。「八月十五日に新潟にも新型爆弾が落ちるってうわさがあったんだよ。で、十四日に、市内にいた誠さんの家族が曽野木に逃げて来たの。あのとき、原爆が落ちていたら、私たちもどうなっていたか。でも、八月十五日、戦争は終わった」
　十五日、天皇が正午ラジオ放送を通じて、「終戦の詔」を放送し、日本はポツダム宣言を受諾し、無条件降伏した。これに先立ち、七月二十六日に、アメリカ・イギリス・中国首脳が対日ポツダム宣言を発表し、日本に降伏を求めていたのである。

## （６）妹の誕生

　八月十五日に戦争が終わって、富山工場の研究所にいた父たちは、始め、ぼーっとしていた。何をすべきかわからず、何も手につかない。数日後、東京の本社から、すべての研究資料を焼却するように、と電報が来た。
「米軍がやってくるぞ」と所長が言う。「ここで軍事用の研究をしていたことがわかったら、ぼくたちもアメリカに連れていかれるかもしれないな」研究者はアメリカで研究させられるかもしれない。
「しかし、すべての研究資料を焼却せよとは」
「すべて焼却したら、これまでの私たちの苦労はどうなるんですか」研究者は自分の研究に未練があった。
「では、焼却するに忍びないから、すべて、土に埋めよう」と所長が提案し、皆で庭に大きな穴を掘って、研究資料をそこに埋めた。穴を掘ったり、埋めたり、力仕事が数日間続いた。
　次に本社から来た電報は、研究所職員全員、辞表を出して辞めるように、というものだった。研究所はいったん解散し、後、再建に必要な者のみ再雇用する、というものだった。しかたなく、父たちは辞表を提出した。父は、再雇用されなかった。
　九月一日、失業した父は、妻子の許に向った。富山から汽車で新潟へ、新潟駅から徒歩で信濃川渡し場へ、渡し舟に乗って曽野木村へ。長い道中だった。
　母は近くの用水路で泥のついた大根を洗っていた。米も野菜も貴重品だ。やっと農家から分けてもらったものだ。
　と、背後に人の気配を感じ、「あっ！」と大根を用水路に落としてしまう。あっ、どうしよう！　大事な皆の食料を！　大根は流れる。
「大丈夫だよ」背後の男が水の中へ入って、大根を拾ってくれた。
「あっ！　あなた！」
　父、谷口英夫だった。
「聡子！」
　二人は手をとりあった。
　曽野木村には、祖母、小学校教師の伯母正子、父の末妹・叔母京子、そして母と子供の姉・比佐子、赤ん坊の私の六人が待っていた。望叔父は終戦間際に出征していた。誠叔父は新潟市内に家族がいたが、本人はずっと前に軍医として応召していた。
「あなた、よくご無事で。富山空襲でお骨になったかと思ったんですよ」
「なんの。研究所はずっと市外にあったわい。それより、お前たちも無事でよかった」
　そこへ、祖母に連れられて比佐子が駆けてくる。
「お父ちゃまあ！」
「比佐子！」父は姉を抱っこする。
「洋子は元気か？」
「はい、すくすく育っていますよ」

「英夫、よかった、よかった！」祖母が目をしょぼしょぼさせて喜ぶ。
　ほんの三ヵ月ほどの別離であったが、このときは三ヵ月が三十年のように思えた。空襲がひどくて、長い三ヵ月だったのである。
　その夜、夫婦はぎゅっと抱き合って寝た。よかった、皆無事で。戦争で離れ離れになっていた夫婦の再会だった。

　その後、父は、新潟の知り合いを訪ね、師範学校に職を得た。
　周りでは、応召していた男たちが次々と帰ってきていた。父の二人の弟、誠も望も帰ってきた。もちろん、戦死した人々も多かったのだが。
　女たちも、忙しく、男たちを喜び迎えた。そして、次々と身ごもる。母も例外ではなかった。
　昭和二十二年五月、妹が生まれた。ベビーブーム、団塊の世代である。父母は妹に美代子、と名づけた。

## (7)四人目の子

父は、戦争に反対できなかったことを、悔やんでいた。防空壕の中で父は思ったという、第二次世界大戦は阻止できなかった、が、この戦争はやがて終わるだろう、そうしたら、今度こそ、第三次世界大戦の起きないよう、自分はがんばって働こう。生き延びることさえできたら、そのときは。

そう思っていた父だから、新潟師範学校に就職した後は、教職員組合の設立のために働いた。身体の弱い父が、連日組合のために働いて、百日咳になったが、それでもがんばった。組合の書記長になった。

この頃、戦争に敗れた日本は、ＧＨＱ（連合国軍最高司令官総司令部）によって支配されていた。ＧＨＱは、始め、日本の民主化を推し進めていたが、労働運動が激化し、また昭和二十四年（一九四九年）中華人民共和国が成立して朝鮮半島も不穏な情勢になり、冷戦が始まると、反動政策をとり、労働運動を弾圧するようになった。共産主義者及びそれに同調するものを職場から追放する、レッドパージが始まった。昭和二十五年（一九五〇年）六月、朝鮮戦争が勃発すると、さらにその勢いが増した。父の職場でも首を切られる人々が出て、父は組合の先頭に立って戦った。

だが、父は病気になってしまう。胆のう炎だった。大学病院に入院し、原因を調べたら、どうも寄生虫らしい。医師は父に、虫下しの薬を大量に飲ませた。数日後、死んだ回虫が三匹、出て来た。回虫が胆管の中に入り込んでいたのである。それは解決したが、その他に身体検査で要注意になった。大学病院で精密検査を受けると、左肺上葉浸潤があるが、すでに固まりかけているから、半年ほど無理をせず、静かに勤務していれば完全に石灰化するだろう、ということであった。父はこのときから十年間ほど、要注意であった。

この頃、ＧＨＱによる学制改革も行われ、師範学校は大学の教育学部として再編成された。新潟でも、医科大学や各専門学校が統合されて新制新潟大学が誕生した。師範学校は廃校となり、病気になっても組合運動をやめなかった父は新潟大学に採用されなかった。首切りである。

母の話によると、父は、北海道の大学に行くように、といわれたそうである。それは母の気に入らなかった。東京で生まれた母は、親たちの仕事のために新潟県に移住したのも気に食わず、父と結婚後もやっと奈良や浦和に引越しできたのに、戦争で新潟に舞い戻ることになり、それだけでも嫌なのに、北海道など、新潟よりもっと北の、寒い土地に行くのは嫌だった。赤子の私や妹の身体が弱いということもあった。

「北海道へ行くなんて、私は嫌です。あなた一人で行ってください。私は、ここで、働いて娘たちを育てます」と母は宣言した。

子供のかわいい父は、北海道へは行かなかった。そのため、失業してしまった。

ちょうどそのとき、母は、またも身ごもっていた。

戦後の改革で、妊娠中絶が、経済的理由のある場合、許可されることになった。母はそれに飛びついた。この話を、私は小学生のとき、母から聞いた。母にはそんなことを子供に言ったりするところがあった。

四人目の子は、私の弟だったのだろうか、妹だったのだろうか、わからぬまま闇に葬られてしまった。
働き口を探していた母は、月潟村というところの中学校で数学の教師を求めていることを知る。母は、数学など、女学校で習っただけなのだ。が、それに飛びついた。免許もないことなので、現在なら採用されるわけもなかったのだが、戦後の混乱期にはそういうこともあった。
月潟村の川向いに茨曽根村という村があった。父方の祖父が生まれた村である。そこに、祖父の所有していた空き家があった。祖父はその村で地主の家に次男として生まれ、医学を学んで医者になったのだが、偏屈で放浪癖のある人物だった。一つ所に定住することができず、東京へ出たり、仙台に行ったり、また新潟県に帰ってきて弥彦村に行ったり三条市に行ったり、あちこちで町医者をやっていた。茨曽根村に帰ってきて、そこでも医者をした。祖父はここで家屋敷をもらった。かなり広い土地と、新しい家とである。そこで医院を開業した祖父であるが、放浪癖はおさまらない。せっかく作ってもらった家を棄て、新潟市近郊の曽野木村に移った。父たち兄弟は、祖父とともに、あちこちへ行ったり来たりしていたわけである。祖父は、結局、曽野木村で、脳卒中で倒れ、亡くなった。父母の結婚前のことである。
曽野木村の家は、借家だったが、茨曽根村には父が祖父より譲り受けた空き家があった。月潟村の近くで、母が通勤するにはちょうどよい。私たちはそこへ引っ越すことになった。父母と、私、妹の四人、それに母が働くために家の留守番がいるということで、父の末妹・京子叔母が一緒に引っ越した。姉の比佐子は、「谷口家の跡取りだから」ということで祖母と伯母正子が離さなかった。姉は、私たちと引き離され、伯母に育てられる。
当時、新潟市の県庁前から燕市まで私鉄が通っており、曽野木も茨曽根もその沿線にあった。越後平野でも、この沿線は、比較的開けた所だった。この私鉄は現在は廃線となり、代わりにバスが走っている。そして、曽野木村も、茨曽根村も、新潟市に合併されている。
茨曽根で、母の新しい生活が始まった。家事と育児、それに学校勤めも両立させなければならない。失業中の父に頼ることはできず、一家の経済は、母の肩にかかっていた。もう以前のような甘えは許されない。
京子叔母は、変わった人だった。今でいう「ひきこもり」のようなところがあった。家で、自分の部屋に閉じこもり、終日寝て暮らすのだ。家事はしない。食事も、家族と一緒にはしない。父母が出かけ、大人たちがいなくなると、部屋から台所に出てきて、どんぶり飯と菜っ葉の油炒めを食べる。食器が自分の思い通りに並べられていないと、ヒステリーを起こしてがたがたかたづける。台所でいつもヒステリーを起こしているので、私はとても怖かった。
それでも、学齢前の妹にすれば、日中、自分と京子しか家にいず、こんな京子でも頼りになったらしい。父母は出かけ、私は小学校へ行っていた。母は、学齢前の妹を家に置いて、働きに行っていたのだ。村にまだ保育所はなかった。父はしばらく失業していたが、やがて新潟市内の博物館に発明相談係として就職した。
母の話。「美代子がまだ小さくて、私はつらい思いをしたよ。朝、私が出勤すると、美代子が走って追いかけてくるんだ。泣きながら追いかけてくる……やっと、京子叔母様のところへ行くんだよと言い聞かせて、電車に乗ったもんだ」

母が仕事を辞めることは問題外だった。

## （８）姉妹の生活

　曽野木村の正子伯母は、谷口家を取り仕切っていた。小学校の教師をして、父や叔父たちの学費を稼いだ伯母である。結婚もせず、何事も谷口家第一としてきた。望叔父が戦争から帰ると、小学校教師の資格を持っている道子と結婚させ、彼女を自分の代わりに村の小学校へ勤めさせた。自分は、もう恩給をもらう資格ができたので、村の学校を退職し、その後釜に道子を据えたのだ。道子は、共働きしながら、姑と小姑に仕えなければならなかった。
　それでも、正子は悪い女ではなかった。性格のいい、新潟県の方言で言えば、「根性良し」だった。正直で、とても人がいいのだ。嫁としては、つきあいやすい小姑だった。だから、道子も我慢できたのだろう。
　母はどうか？　母は、「正子伯母様はいい人だ」と言っていた。「いい人だ」といってほめていたのではない。非難していたのだ。伯母は繊細さとか細かな思いやりなどは持っていなかった。
　母から姉を奪ったのも、随分酷い話だと思う。姉はまだ小学生であった。親や妹たちと引き離してどうするつもりか？
「比佐子を人質に取っておけば、パパが曽野木へ行くからね。私は仕事が忙しくて、比佐子のことまで気が回らなかった」と母は言っていた。
　父は、毎月、曽野木へ行っていた。祖母や伯母、姉に会いに行き、お金を渡してくる。祖母や伯母たちも、父の扶養家族だった。博物館に勤めて、数年後、父は三条市の職業高校に物理の教師として勤務することになったが、扶養家族が多いせいで家計の苦しさは変わらなかった。が、母は、それについて、文句は言わなかった。祖母たちの生活は、父のお金と、大学病院付属高田分院の医師になった誠叔父からの仕送り、その他で成り立っていた。誠叔父は、自分の指導をしてくれた教授に死なれて出世コースから外れ、不遇のまま、遠くの高田市の分院に勤めさせられていた。
　さて、親から引き離された姉のことだが、姉は生来、明るくて人懐っこい性格だった。誰とでも仲良くなる。伯母や祖母になついて、親と一緒にいないこともさびしいと思わず、学校でも大勢の友だちがいた。学校が長い休みになると、茨曽根の私たちのところに来た。
　農村のことで、その頃、学校には農繁期休みというのがあった。田植えと稲刈りのとき、学校を休みにして、子供たちに農家の親の手伝いをさせる。うちは、農家ではなかったから、田植えも稲刈りもなく、農繁期休みには、充分遊べた。農繁期休みになると、姉がやって来る。曽野木村も農村で、同じ時に農繁期休みがあったのだ。私と妹とは、姉が来てくれるのがとても楽しみだった。
　姉は「お洋様」といって私をからかう。
　私は姉を「小林比佐子！」といってからかっていた。小林勇は姉のボーイフレンドで、曽野木村随一の秀才だった。
　妹はどうだったろうか？　妹は泣き虫で、弱い子だった。私はいつも妹をいじめて楽しんでいた。

「また美代子を泣かす！」と母が怒る。怒られても、すぐに泣きべそをかく美代子をかまうのは楽しかった。
「あーん！」といつも泣く美代子。だが、あるとき、美代子は泣きながら私に向かってきた。びっくりして私が逃げると、家の外までワンワン泣きながら私に向って走ってくる。幼い妹の反抗であった。私は驚いて、以後、妹をあまりいじめなくなった。
　妹は、音楽を習いたいのだった。楽器の好きな子で、小学校でハーモニカを習うと、もっとハーモニカを習いたいと母に駄々をこねた。困った母は、学校の先生に、「美代子にハーモニカを教えてやってくださらないでしょうか？」と頼み、先生を怒らせた。音楽などわからずにやっと教えている田舎の先生に頼むこと自体、無理な話だった。
　母は、私たちに、ピアノを買ってくれた。が、ピアノ教師は、学校の先生くらいしかいなかった。
　私は独学で、少し、ピアノを勉強したが、すぐに止めてしまった。妹は、止めなかった。中学校の先生にピアノを習って、いつも弾いていた。「バイオリンの少女」という少女小説を読んだ妹は、「バイオリンを習いたい」とまた駄々をこね、母を困らせた。田舎のことで、バイオリンは買ったが、先生などどこにいるか。いろいろ調べて、隣町にバイオリンを弾く青年がいることをつきとめ、その人に美代子のことを頼んだ。しばらく妹はその人にバイオリンを習っていたが、中学生になってからは、ピアノに戻った。この頃から、彼女は音楽で生きていくことを決めたのだった。

## （９）母の単身赴任

正子伯母は、姉のボーイフレンド、小林勇が気に入った。頭のいい少年で、新潟大学医学部をめざしている。姉も理科系の勉強が好きだ。よし、この少年を医者にし、比佐子を薬剤師にして、自分たちはこの二人にぶら下がって生きよう、将来扶養してもらおう、と考えた。

姉の話からどうも伯母がそう考えているらしいと知って、母は怒った。父に、「比佐子をうちに返してもらってください」と要求した。伯母にも「年頃の娘をこれ以上縛っておいて、私は何があっても知りませんよ」と怒りの言葉を投げつけた。姉は中学校を卒業する年齢になっていた。

中学卒業と同時に、姉は親元に帰ってきた。伯母も、譲歩したのである。私たち三人姉妹は、姉が高校を卒業するまで三年間、一緒に暮らすことができた。姉は新潟市の女子高校に進学していた。男子系の共学高校に入学した小林勇とは、以来、疎遠になった。

姉は、私のように本の虫ではなかったが、勉強はよくするほうだった。夕食のとき、何冊も数学や英語の参考書を積み上げて私たちに示し、「私、これからこれだけ勉強するの」と自慢した。ラジオを聞きながら勉強するので、父に「比佐子はながら族だな」と笑われていた。

親が勉強しろと言わないので、姉は「うちの親は根性が悪い」と文句を言っていた。「勉強しろと言わないで、自然に子供が勉強するようにしむける」だから「根性が悪い」となる。

こうして私たち、三人姉妹は、姉が高校を卒業するまで三年間、一緒にくらすことができた。考えてみれば、三人が一緒に暮らせたのは、この三年間だけだった。私は中学生になった。

姉の大学進学時期が近づく。高校教師は、姉のことを「ちょうど東京女子大に向いています」と言った。

母はぶつぶつ言っていた。「東京女子大は、卒業のとき、振袖を着て式に臨むんだよ。卒業写真にそう写っている。そりゃあ、そういうことに超然としている学生もいるだろうけれど、比佐子はどうかねえ。うちは、貧乏で、振袖など作ってやれないよ」だから東京女子大はダメという。実際は、四年後、姉が静岡薬科大学を卒業するとき、母は振袖を作ってやったのだが。

姉は、新潟大学教育学部と静岡薬科大学を受けた。「私、学校の先生になりたかった」と姉は後で言った。が、父母は、姉を教師よりも薬剤師にしたかった。教師は薄給だから……と教師である二人は考えていた。しかし、必要な学費はどうするか。教育学部ならアルバイトさせて卒業させることができるだろう、しかし薬科大学では、理科系だから、勉強がたいへんでとても勉強とアルバイトは両立しないだろう、その上、静岡では下宿させなければならない。その分学費がかかる。父は、母と相談の上、高田の誠叔父のところに行った。医師をしている誠叔父には子供がいない。薬剤師になる比佐子に学費を援助してくれないか、と打診に行ったのだ。叔父は快諾し、姉は薬科大学に進んだ。ただ、その後、実際に姉に仕送りしたのは父だけで、叔父の援助はなかったらしい。

母は、中学生に数学を教えていた。でも、母は数学など知らなかったのだ。父が物理の教師だったので、毎日、家で父に数学を習っていた。父は教えることは好きだった。

私は高校に進学し、妹は中学生になった。

母の勤めている川向こうの月潟村の中学校へ、新しい校長が赴任して来た。この校長が問題で、母はいつも家で「校長が嫌だ、校長が嫌だ」とこぼしていた。妹の話によると、「校長はママが好きで、ママに近づこうとするのよ。好いてもらおうと、いろいろ近づくので、ママはそれが嫌でたまらなかったのよ」ということである。母は「高校に行きたい」と考えた。

世話になった教育庁の指導主事が、母の女高師の先輩だった。母はそこへ駆け込んだ。

「高校教師の口はありませんでしょうか？」

「家庭科ならありますよ」

免許も学力もない母が、高校の数学の教師をやれるはずがない。先輩は、津川という所の高校に家庭科教師の口があると言った。津川は福島県との境にある、山の中である。とても茨曽根から通えるわけがない。単身赴任してもいいか、と母は父に尋ねた。

土・日に帰ってくるからという母に、父は賛成した。もともと「七夕夫婦」の好きだった父なのだ。

「洋子、お前はいいかい？」と母は私にも尋ねる。

「お前が受験を控えているから、私は心配なのだけれど」

「私はいいわよ」と私も賛成した。

母は中学生の妹を津川に連れて行った。で、土・日には、妹を津川に置いて、自分だけ茨曽根に帰って来る。そういう生活が続いた。

家事はどうしたか？　家事といっても、食べるための仕事であるが、最低のことは京子叔母がしてくれた。ご飯を炊いて、菜っ葉の油いためは作ってくれた。それだけではおかずにならないから、私は三条市の高校に通っていたので、学校帰りに、スーパーマーケットに寄って、食品を買ってきた。スーパーマーケット、今では簡単にスーパーというが、この頃、昭和三十年代、「主婦の店」という名で三条市にできていた。母がいない不自由はあまり感じなかった。

## （１０）千葉へ引っ越す

　昭和三十七年（一九六二年）、私は高校を卒業し、上京した。東京外国語大学に入った。ちょうどこのとき、姉も大学を卒業し、東京の専売公社に勤め始めた。タバコの研究の助手である。専売公社は現在は日本たばこ、ＪＴとなっているが。私と姉とは、東京は世田谷の狭いアパートに二人で暮らした。四畳半一部屋の木造アパートである。当時はこれくらいが普通だった。
　姉はいつも帰りが遅かった。帰りが遅いだけでなく、杉並区永福町の裕子叔母の家に泊まって、アパートに帰らないことが多かった。
　アパートの部屋に電話はひいてなかった。大家のおばさんの所に電話がかかってくる。
「谷口さん、お電話ですよ」
　呼ばれて出ると、いつもの姉の恋人、橋本豊だった。姉はいつも裕子叔母の所に行っていて、いないのだ。
「もしもし」
「比佐子さんですか？」
　私の声は、姉の声に似ているらしい。
「いいえ、妹ですが。姉は、今はいません」
　私は気がきかないので、叔母の家の番号を教えることはしなかった。いや、むしろ気がきいたのか？　姉が帰ってきたとき、「橋本さんから電話あったよ」と言っても、姉は、「そう」と言うだけで、うれしそうにも残念そうにもしない。
「私がいくら好きでも、私なんか、たいしたことないから、向こうが相手にしてくれないもんね」とさびしそうに言っていた。姉には、片思いをしている人がいたらしい。私はまだ幼く、姉をはげましてやることができなかった。
　姉妹二人の共同生活は、一年で終わった。というのは、二年目に、父が千葉に引っ越してきて、私たち姉妹もそれに合流したのだ。
　新潟県の公立高校に勤めていた父は、定年退職の日を迎えていた。次の就職先を探さなければならない。同じ高校にやはり定年を迎えた同僚がいて、その人のところに、千葉県の習志野市にある私立学校の教師にならないか、という話が舞い込んだ。同僚はそんな遠くには行かないという。父は「ぼくが行きたい」と立候補した。
　千葉は暖かい所であるという。父より一年前に大学病院を定年退職した誠叔父は、なんと同じ習志野市に退職金をつぎ込んで土地を買い、そこで医院を開業していた。しかし、はやらない医院なのだった。
「千葉は気候がいいから、病人がいないそうだ」と父はおもしろそうに笑っていた。「誠が医院を開業しても、病人がいなくて、誰も来ないそうだ」
　千葉にも病人はいた。ただ、新潟から新参者の叔父が行っても、なかなか評判が広まらず、医院は閑古鳥が鳴いていたのだ。何年かたつうちにはここにも患者が大勢来るようになったのだが。
　父母にとって、「雪の降らない、暖かい土地」は、あこがれの的だった。戦争で心ならずも新

潟県にとどまってしまった、できれば東京近辺に行きたい、暖かい土地に行きたい、と父も母も思っていた。私の幼い頃、母は口癖のように「暖かい土地に行きたい」「雪の降らない所に行きたい」と言っていた。その暖かい土地への移住話が目の前に来たのである。父は喜んで飛びついた。

茨曽根の家を整理して、父は習志野に来た。母は、その頃、津川の高校から県の教育庁に転任していたので、しばらく新潟市内に下宿して、通うことになった。京子叔母は曽野木に帰った。妹は、始め母と共に津川に行き、一年後にピアノのある茨曽根に帰ってきていたが、これもピアノを新潟市内に移して、母と暮らすことになった。新潟市の女子高校に入学していたのである。

父と姉、私の三人は、習志野市にある高校の職員住宅に入った。そこはちょうど誠叔父の谷口医院まで歩いて五分の所だった。

## （１１）姉の結婚

　橋本豊と姉とは大学の同期だった。学生時代の恋人である。勉強家の姉は、豊にノートを貸したりしていたようだ。
　静岡に間借りしていた学生時代、あるとき姉が、大学の休みでもないのに、突然、家に帰ってきて、父に五万円下さいと言った。娘に甘い父は、その金の用途も聞かず、融通してやった。姉は五万円受け取って、トンボ帰りに静岡に帰った。
　姉の大学卒業式に母が静岡に行って、姉の友人から情報を仕入れてきた。姉はその五万円で豊の子をおろしたのだった。
　卒業して、姉は東京に、豊は大阪の製薬会社に就職した。別れ別れになってしまった。姉はどういう気持でいたのだろう？　豊とは着かず離れず、遠距離恋愛というのでもなく、距離を置いていた。
　まだ世田谷に姉妹で下宿していたとき、教育庁の用で上京した母が、私たちのところに来て、姉に話していた。
「私の先輩がお前に見合い話を世話するっていうんだけれど、お前、お見合いしてみる？」
「……」姉は黙っていた。
「お前の橋本さんに対するなけなしの恋愛感情にかけてみるかどうか、母親としてはそれが問題なんだよ」
「……」
「まあ、橋本さんは資産家の息子だそうだからね。でも、養子だしねえ」
　静岡の大学に来ていた豊は、家が名古屋にあった。養父母には実子がなく、豊は親戚からもらわれてきた養子だった。そのため、養父母に何かと遠慮があった。養父はサラリーマンだが、土地と貸家とをいっぱい持っていた。資産家である。
「相手の人柄がいいってことが縁談のよい条件なら、相手が資産家であるってこともいい条件なんじゃないかしら？」と姉は回りくどい言い方をする。「そういうこと、考えてもいいんじゃないかしら？」
　しかし、養子で、一人っ子である。舅、姑が健在である。
　大阪の会社にいた豊が、名古屋の保健所に転職した。親元に帰ったのである。
「せっかく大阪に就職したのに、わざわざ名古屋に帰るなんて」と姉は怒っていた。
　夜、豊から電話がかかってくる。彼は姉と結婚する気でいるのだ。姉は、どうするか。
片思いの相手は、母一人子一人の境遇らしい。「いい人だけれど、そういうのもどうかな？」と姉はぶつぶつ言っていた。好きな相手は自分に振り向いてくれない。結婚適齢期は、どんどん過ぎていく。昭和三十年代後半、まだ女性の適齢期は厳然としてあって、独身のまま二十五歳を過ぎればハイミスと呼ばれた。
　姉は豊と結婚する気になった。
　しかし、嫁ぎ先は名古屋である。
　名古屋の習慣では、娘は嫁入りするとき、衣装も道具もいっぱい持参しなければならない。娘

三人いれば家が傾く、といわれる名古屋である。父母とも教師で、姉の下に学費のかかる娘が二人もいる両親にしてみれば、これは重い負担だった。
「うちは、そんなには嫁入り支度してやれないんです」
　と、家に求婚に来た豊に、父はクギを指した。
「はい、できるだけでいいです」と豊は答えた。
　父親としてそれだけで満足するべきであった。だが、父は図に乗って、
「私は結婚式には出ないです」などと続けた。
「なんでです？　なんで親が娘の結婚式に出ないんです？」
「私はこの結婚に反対なんだ」
「反対って、いまさら何を」豊は怒った。ぷりぷり怒って、帰って行った。
　バス停まで姉が見送りに行く。私はその後からついていった。
　バスに乗った豊に、私は「ごめんなさいね！」と声をかけた。父の無礼をわびたかった。
　後で、私は父に文句を言った。「パパ、なんでお姉ちゃんの結婚に反対なの？」
「親がインテリでないからだ」と父は言う。橋本豊の養父母が資産はあっても、学歴がない、両親とも小学校出なのが、父には気に食わないのだった。うちとは全然違う環境の家に嫁いだら、姉が苦労する、というのだ。
「パパ、それは階級差別でしょ」私はマルクス主義者の父に決め付けた。
　階級差別などと、痛いところをつつかれた父は、それ以上この結婚に反対しなくなった。
　そして、結婚式。
　昭和三十九年（一九六四年）十月一日、東海道新幹線の開業と同時に、名古屋で結婚式が執り行われた。
　ちょうど母のいとこが、当時、名古屋で銀行支店長をしていたので、その人に仲人を頼み、父母は名古屋へ向った。習志野の谷口医院の誠叔父夫妻、それに杉並の裕子叔母夫妻にも出席を頼み、皆、新幹線で日帰りした。新幹線の切符は姉があらかじめ、有楽町駅に並んで買った。何しろ新幹線開業の日の切符である。姉は長い行列に並んだのだ。妹である私と美代子は、式に列席させてもらえなかった。父母は、二人の新幹線の乗車賃を払いたくなかったのである。

## （１２）丙午

新潟の妹は、受験を控えていた。音楽大学受験のためには、新潟の先生についているだけではダメ、ということで、美代子は、毎月、特急列車で上京して東京の音楽大学の教授の許にピアノのレッスンを受けに来ていた。日曜日の朝、上京してその先生のレッスンを受け、日帰りでまた新潟へ帰る、というトンボ帰りをしていた。それがかなりきつくて、美代子にとっても負担であったが、経済的には母が苦しかった。「音楽大学ってのは、入学してからよりも、入学する前にお金がかかるんだねえ」とため息をついていた。母は、姉の結婚と妹の受験で経済的に困っていた。

昭和四十一年（一九六六年）は六十年に一度の丙午の年であった。丙午の年に生まれた女の子は、気性が荒く、夫の命を縮める、という迷信があった。だからこの年に生まれた娘は嫁の貰い手がなかなかなかった。そのため、この年は丙午の迷信のために、出生率が低かった。生まれてくるのが女の子だったら大変と、結婚を先延ばしにしたり、避妊したりするカップルが多かった。でも、迷信にこだわらず、勇気を持って子供を産んだカップルも少なくなかったのだ。姉たちもそうだった。

結婚して一年余り、姉はめでたく懐妊した。もちろん男の子か女の子かはわからない。だが、そんなことに姉の周囲の人たちは、義兄豊の養父母も含めて、頓着しなかった。

五月、姉は出産のため、習志野の実家に帰ってきた。母は、まだ新潟の教育庁に勤めていたが、できるだけ習志野に来るようにしていた。文部省に用事で来ることが多く、ちょうどよかったのである。

安産で、産まれた子は、なんと男の子であった。まるまると太った、元気な子だった。産婦人科医院で産まれたが、すぐに母子ともに帰ってきた。助産師が、毎日、赤子を入浴させにやって来る。

私たちは、男の子の性器を、初めて、しげしげと見た。何か、性器が二つあるように見える。これでいいのだろうか？　男性の性器はわからない。結婚しているはずの姉にも、母にもわからない。不安になって私が母に聞くと、「助産師さんが異常だと言わないのだから、これでいいのだろうよ」と母が言う。母は男の子を産んだことがない。父と夫婦でも、夜も暗闇で受身になっていただけらしい。頼りにならない母だった。

義兄が、電話で、名前は鉄五郎と名づける、と言ってきた。何でも、同居している養父母が姓名判断を頼んだら、鉄五郎という名がいい、といわれたとか。

「なんで長男なのに鉄五郎なの？」と私や母は不満だったが、姉は養父母には逆らわないことにしているらしかった。

「でも、よかったわね、丙午の男の子で。これで、高校受験も大学受験も就職試験も競争相手が少なくて、運がいいじゃない」

「うん。今年、産んで、よかった」

と、皆、喜んだが、これはこの甥の大学受験のとき、ぬか喜びとなる。現役での受験に失敗した甥は、一年浪人して、翌年のベビーブームに生まれた子たちと競争することなり、大変な難関を突破しなければならなかったのだ。

ともあれ、それは後年のこと、このときは初孫の誕生で、父も、母も、大喜びだった。

## （１３）妹の進学

　音楽の道に進みたい妹にとって、地方にいることはとても不利だった。東京にはいい指導者が大勢いるが、新潟には学校教師くらいしかいない。小さいときからピアノを習っている都会の娘たちと競争するのは、とても大変だった。美代子が本格的にピアノを習い始めたのは、中学生になってからだったし、学校の先生たちに放課後、教えを受けただけである。高校でも、同じようなものだった。母は伝を頼んで、東京の音大の教授に月一回教えを受けられるようにしてやったが、教授には弟子が大勢いた。音大の教授の弟子なら大学にも合格するだろうと思ったのが、読みが甘かった。美代子は受験に失敗してしまう。
　私は後で母を非難した。「なんで美代子を新潟市に連れて行ったの？　なんでパパのところに来させなかったの？　パパが習志野に来たとき、美代子も来ていれば、首都圏にはいい先生がいっぱいいたのに」
「だって、それじゃあ高校を転校させなければならなかったじゃないか」
「パパの勤めている高校に入学させればよかったのよ」
「だって、女子高の校長が、転校させないほうがいいって言ったんだもの」
　美代子の行った高校は、新潟では名門だった。だが、田舎者には現実がわからない。名門の女子高を出たとて、そんなことは自慢にもならない。音大へ入るためには、地方にいては不利なのだ。
　美代子は、一年浪人して、東京の音楽系予備校に入った。そこで、初めて、彼女はほんとうの音楽教育に触れたのだ。求めるものにやっと恵まれた妹は、めきめきと上達し、性格も明るくなった。楽理（音楽理論）を習った妹は、私たち家族にも難しい理屈を言うようになった。
　翌年、音大の楽理科に合格した。

　母はピアノのことで、また、悩みをかかえてしまう。
　楽理科でも、ピアノは基本である。だが、ピアノは、重く、大きい。持ち運びできない。新潟から習志野に運んできたが、美代子の入学した音大は、遠く、東京都下にある。習志野からはとても通いきれない。下宿しなければならないが、ピアノ付きの下宿というのは、難しかった。当時は、現在のように学生用のワンルーム・マンションがあったわけではない。普通のアパートしかない。普通のアパートに重くて大きいピアノを置くのは難しい。美代子と母とは、アパート探しに苦しむ。
　裕子叔母に美代子とピアノのことを頼んで、母は断られた。叔母は、その頃、叔父の姪を養女にして、その養女とのいざこざに苦しんでいた。叔母にすれば、叔父の手前、自分のほうの姪を家に入れて仲良くするわけにはいかなかったのだ。母は、「妹なんて頼りにならない」と怒っていた。
　散々探して、ピアノを置いてもいいというアパートはやっと見つかったが、それまでの母の苦労は大変なものだった。親は子供で苦労する。

私も、親たちに苦労をかけた。学生運動などをして、大学を留年したり、病気にもなった。病気……私は、双極性障害などになったのである。そのため、大学卒業後も、失業したりした。結婚も遅れた。

新潟の母は、首尾よく千葉県に転任できた。文部省に出入りして、女高師出の千葉県教育庁家庭科主事と親しくなり、その伝で千葉県の家庭科教師になれた。始め、銚子市の高校に勤め、銚子に下宿していたが、数年後には千葉市の高校に転任できた。平日は銚子にいて、土・日だけ家に帰ってきていたが、そんな生活も終わり、私は父母と三人で一緒に暮らせるようになった。

父は千葉市に家を買えた。家といっても、団地の一戸、集合住宅だが。埋立地に建設された団地である。私たちにとって、楽しい我が家ができたのだった。

## （１４）妹の結婚

昭和四十三年（一九六八年）から四十四年（一九六九年）にかけて、激しい学生運動の波が全国の大学に吹き荒れた。日大や東大、その他の多くの大学に、全共闘（全学共闘会議）が作られた。以前は学生運動の伝統などなかった大学も、例外ではなかった。美代子の音大もその波をかぶった。

大学に入るまで、美代子は芸術至上主義者みたいなところがあって、政治には目を向けていなかった。学生運動家の私とは違っていたのだが、時代の波は避けがたかった。彼女も音大の学費値上げ反対闘争に参加した。

そのためにかどうかわからないが、大学院に入れなかった。音楽の理論の好きな美代子は、大学院で音楽の研究をしたがっていた。が、何度受けても、落ちる。嘆いている妹に、私が言ったのだ。「医学なら、大学から離れたら研究ってできないわね。でも、音楽は、大学から離れても、研究ってできるじゃない。それがいいっていうわけじゃないけれど、でもそういうことってあるじゃない。大学院に行かないでも、研究したら？」

「うん」と妹はうなずいた。

彼女は音楽関係の出版社に就職し、オペラやミュージカルの批評を担当していたが、ある程度仕事ができるようになったら、会社を辞め、フリーになって音楽評論家として仕事するようになった。

母が千葉県立高校を定年退職することになった。再就職先は千葉市の私立保育専門学校である。

退職金をもらったので、母はそれで娘の家を買おうと考えた。そのとき、私は船橋市の公立中学に勤めていた。妹は各地の音楽会に行って批評を担当する。音楽会は夜なので、千葉市では遠すぎた。帰りが遅くなるので、交通の便のいい所に住みたいという。ちょうど地下鉄東西線ができたばかりだ。東西線沿線のマンションを買おう、二人の娘が一緒に住めるように、と母は考えた。

銀行に就職した教え子が、東西線行徳駅の近くのマンションを紹介してくれた。私と妹とはそこに引っ越した。

私たちがそこに住み始めた頃、そこはまだ埋め立てられたばかりで、荒地のままだった。あちこちに、ぽつぽつとマンションが建てられている。スーパーは駅の近くに一軒あった。まもなく開発されて、マンションの多い市街地になったが。野鳥の住む浜辺が近くにあった。

そこに二人で暮らしていたが、私はまもなくまた病気になって、入院し、退院後は親許に帰った。結婚して、埼玉県に移った。

遅い結婚だった。妹も、いつまでも一人でいる。

結婚する前、私は妹に、「私に遠慮せずに、先に結婚していいよ」と言っていたが、彼女は「別にお姉ちゃんに遠慮して結婚しないわけじゃない」と言っていた。

その妹にも恋人ができた。しかし、独身主義の恋人は、結婚はしないという。落胆した妹は、

彼と別れ、今度は一流企業のエリート技術者と交際し始めた。
「ダメなのよねえ、やっぱり好きになれなくて」
「好きになれない……でも、一流企業のエリートなんでしょ。結婚するなら、そういうことも計算に入れたらいいんじゃない？」
「そういうことを考えると、どこも悪いとこのない人だから、ついつきあっちゃうのよね」
「ふうん」
「でも、彼とデートしていると、ああ、早くこのデートを終わりにして、帰りたいなあって、思っちゃうの」
　それではダメであった。
　妹の友人が、自分のご主人のお友だちを紹介してくれた。それが吉岡充である。
「この人は、いままでの人のうちで、一番いい人なの」と美代子は言い、充と結婚することに決めた。読書とカメラの好きな、美代子より一歳年上の青年であった。

## （１５）介護

　姉は専業主婦になった。名古屋に行って、薬剤師として就職するつもりでいたが、同居する姑が「私に子育てをやらせないでね」というので、仕事はあきらめ、子育てに専念することにした。子供は、鉄五郎の下に、女の子が二人、できた。
　私は結婚して、相手の先妻の子を育てなければならなかった。それは始めからわかっていたことだった。義理の息子を育て、その子が十歳になったとき、再就職した。それでも、病気が再発したりして、最初に勤めた教材会社は辞めなければならず、後は、塾に勤めたり、団地の管理組合の事務をしたりした。自分の子供はできなかった。
　妹は、結婚当初は子供は作らないつもりでいたらしい。母の話によると、「偶然、流産したんだって。そうしたら、前は子供のことなど考えなかったのに、子供がほしくなってしまい、旦那まで子供のことを考え、作ることにしたんだそうだよ。それで荻野式でめでたく懐妊したというわけ」である。
　そうして一人娘のさち子が産まれた。父親の充にそっくりな器量よしの女の子だった。
　しかし、子供を育てながら仕事をするのは、大変だった。妹はフリーの仕事だが、音楽会は夜にあるので、夜、家を空けることになる。幸い、保育所にはすぐに入れたが、夜の問題があった。妹は、同じマンションに住んでいる人に、保育ママさんを頼み、自分の不在のときの育児をしてもらった。一方、充は協力的な父親で、美代子が仕事のある日は、夕方早く帰ってきて、さち子の面倒をみてくれた。
　それで問題もなく過ぎたのに、世間にはつまらないことを言う者がいる。
「昼も夜も子供を預けて働くなんて」と非難する人もいた。美代子は自分で全然子育てしなかったわけではないのに。
　そんな中傷は気にせずに、働けばいいのだ。妹は、音楽評論家として働き続けた。

　平和なうちに、年月が過ぎた。
　父も母も、二度目の定年退職をした。その後、父母は団地の子供たちに数学を教えるなどしていたが、それも寄る年波には負担になってきて、辞めた。
　父は親友の長谷川博とは、長い間、文通したり、ときには会ったりしていた。彼は神戸の大学の教授になっていたが、そこも退職し、長野県の信濃追分に別荘を建て、そこでずっと暮らしていた。父母はその近くの奥軽井沢に別荘を建てていて、父はよく長谷川宅へも遊びに行っていた。が、長谷川は八十歳になる前に亡くなった。
　父は、八十歳代に、母は七十歳代になっていた。年をとると、病気になりやすい。母は、乳ガンの手術をしなければならなかった。
　何年も前から、母は、乳房にしこりがあるのに気づいていた。ところが、どの婦人科へ行っても、医師は乳ガンを見つけてくれない。母がぐずぐず言うと、「切りましょうか？」などと言う。
「切る」と言われて怖くなった母は、「い、いいえ、けっこうです」と尻込みした。「切る」と

いうのは針をさして細胞をちょっとだけ切り取って調べることなのだと、母は知らなかった。
また、乳房のしこりに気づいたら、婦人科ではなく、乳腺外科か一般の外科に行って診てもらうべきなのだと、母は知らなかった。
　散々、方々の婦人科へ行って、求める結果を得られず、やっと母は外科へ行った。
　そこの医師は、母のレントゲン写真をじっと見ていて、「あっ！　これか！」と言った。
乳房の奥にあるガンを、ようやく見つけてくれたのだ。そのとき、母は、やっとわかってもらえたとうれしかったという。
　すぐに手術になった。
「私は、三人の子供に乳をあげたのに、乳ガンになるなんて。乳ガンは独身の人とか子供のいない人がなると思っていたのに」と母は愚痴った。「私はガンにならないように、随分気をつけてきたんだよ」
　乳ガンの手術は成功したが、数年後、母は今度は肺ガンになった。
「乳ガンからの転移ではないんだって言われたの。原発性の肺ガンだって。でも、なんでだろうねえ？　あたしは煙草を吸ったことはないし、公害のない、いい空気を吸うよう、気をつけてきたのにねえ」
　しかし、自分から煙草を吸わなくても、受動喫煙というのがある。父も煙草は吸わない。が、長い間、母は教員生活をしてきたのだ。当時、多くの学校の職員室は、教員たちが喫煙する煙草の煙で充満していた。母は、肺ガンの手術もしなければならなかった。

　父は、めまいがすると言って、行きつけの内科で診てもらい、検査の結果、脳梗塞の後遺症だと言われた。
「前に一人で新潟に行ったときだな、おれは新幹線の中で意識を失い、しばらくして意識も戻ったので、そのまま旅を続けたんだが……あのときのが、その軽い脳梗塞だったんだなあ」と父は述懐した。
　だが、父は、自覚が足りなかった。内科へ行って、薬をどっさりもらい、飲まなかった。私が父の許へ行くと、大きな袋に入った薬の山を見せ、「ほら、医者ってこんなにいっぱい薬をくれるんだよ」と笑っていた。薬が多すぎて、飲む気になれないらしかった。
　私もまた、ことの重大さに気づいていなかった。その先生の許に父の容態を聴きに行き、「頭のいい人だけれど、ぼけてしまう可能性もありますね」と言われたのだが、ぼけは防げるように思えた。
そして、ある朝、私が勤務先の管理組合に出勤しようとしていたとき、母から電話がかかってきた。
「パパが倒れた」
　あ、きたか、と思い、すぐに勤め先に欠席の連絡をいれ、父母の家に向った。私は、そのとき、父母と同じ団地に住んでいた。結婚して、夫の家のある埼玉県に行ったのだが、まもなく、父母の住む千葉市の団地に帰ってきていた。母が「面倒をみてやるから、近所においで」と言って、団地の一戸を買ってくれたのである。

父母の家に行くと、父はトイレで倒れていた。トイレで力んで、脳卒中の発作を起こしてしまったのだった。すぐに救急車で、かかりつけの病院に運んでもらう。私が病院についていった。
検査の結果、脳梗塞の再発だといわれた。そのまま、しばらく入院した。
このとき、まだ介護保険はなかった。介護サービスは、市役所がやっていたので、そこに申し込んで措置してもらうほかなかった。父母の年金の源泉徴収表を提出して、頼まなければならない。すべて、父の入院中に準備しなければならなかった。車椅子を買って、お風呂場を改造して、父の寝室に介護ベッドを入れて、ホームヘルパーを頼んで。
家は、団地で、狭く、段差が多い。車椅子は家の中へは入らないので、階段下に置いた。幸い、家が一階にあったので、助かった。ここは四階建ての集合住宅で、エレベーターがないのだ。部屋が狭い。その狭い部屋に介護ベッドを入れなければならない。それまで父の寝ていたダブルベッドを棄てなければならない。父はダブルベッドに一人で寝て、夜中にそこから滑り落ち、「うわー！」と大声をあげていた。ダブルベッドからも落ちるのだから、シングルベッドには寝られないのだ。介護ベッドは手すりに囲まれているので、落ちない。しかし、大きいので、父愛用の机も棄てなければならなかった。
机……以前、父が机に向って勉強していた。難しい大学入試問題を解いていたのだ。父は研究者ではなく、教育者になるために生まれてきたような人だった。だが、この頃は、すでに入試問題を解く力はなく、机に向って酒を飲んでいた。朝起きて酒を飲み、昼にも酒を飲み、夕方も酒を飲み、寝る前にも飲み、寝てからも夜中に起きて酒を飲む。日本酒も焼酎もビールも飲み、ウィスキーは水割りにするとおいしくないといってワインで割って飲んでいた。
「パパの机、棄てていいかねえ？」という母の躊躇に、私は、
「いいのよ。パパは机に向って酒を飲んでいただけなんだから」と切り捨てた。父愛用の机も、教育関係の大量の書物も、粗大ゴミと古紙回収に捨てた。情け容赦もなくそれらを捨て、私は何か父の肉体を切り刻んで捨てているような気がして、苦しかった。
父は酒ばかり飲んで、身体を悪くした。もともと片耳が聞こえないので、電話は苦手であった。会いたくてたまらない伯母に電話することもできない。それなのに、酒屋に電話して酒の注文をすることはできるのだった。三日にあげず、高価な酒を注文するので、酒屋のいいお得意先だった。
父は退院して家へ帰ってきたが、脳梗塞になって、酒も飲めなくなっていた。食事がまずく、酒もまずい、と言う。寝たきりで、それでも起きてトイレにいくことはできた。だが、一日中寝ていて、何の楽しみもないようだった。
「机がない……」とぶつぶつ言う。
「パパが、机、机って言うから……」と母はせつながっていた。私は、苦しかったが、無視していた。
父の介護のために、私は職場を辞めた。これは、しかたのないことだった。
それでも、母がいてくれたので、随分、助かった。一人の老人を、二人で介護する。日中父を一人で置くことは不安で、必ず母と私のどちらかが家にいるようにした。二人で外出することはできない。母と私は同じ俳句サークルに所属していたのだが、二人同時にそこへ行くことはで

きず、かわるがわる出席していた。俳句の仲間は、「お父さんを車椅子で連れてきて、一緒に出席すればいいんじゃない？」などと言ったが、まさかそういうわけにもいかなかった。それは残念だったが、二人で協力して介護したので、楽だった。姉妹も協力してくれた。姉は、月に一回ほど名古屋から遠距離介護に来てくれた。市川市の行徳にいる妹は、週に一回ほど来てくれた。私は妹には充分に仕事をさせてやりたかった。

ある日、早朝、自分の頭の上にある蛍光灯が切れたため、ベッドの上に立って蛍光灯を直そうとした父は、「わあ！」と叫んで倒れてしまった。何事かと母が驚いて飛んでいくと、父は畳の上に倒れこんでいた。足を骨折していた。

朝、また私のところに母から電話がかかってくる。

「パパが倒れた」

訪問看護してくれる看護婦さんに来てもらう。

「整形外科に入院ですね」

「整形外科って」

「M整形外科」

「ああ、あすこは……」

近所の整形外科で入院設備のあるのは、M整形外科だけなのだ。しかし、そこは非常に評判が悪い。M整形外科に通っても治らない、という話をよく聞く。近所で交通事故があると、救急隊員はM整形外科に運ぼうとするが、怪我人が「Mにだけは運ばないでくれ」と頼むそうだ。そういう話がある。しかし、これは通らなかった。父はM整形外科に入院した。

そこにも一ヵ月ほどしか入院させてもらえず、後、リハビリのために八千代市の病院に転院する。父はつらいリハビリを嫌がった。入院中、思うようにことが運ばないもので、怒って、怒鳴り散らす。母や私を怒鳴るならいいのだが、看護婦や、医師にまで怒鳴り散らす。怒鳴られても相手は病人なんだから、と許してもらえればいいけれど、医師の中には本気で怒る人もいた。

「この病院は、何も無理をして入院してくれなくてもいいんです！」と言われた。

「おじいちゃん、お医者様や看護婦さんには感謝しなければならないのよ」となだめても、

「医者や看護婦は商売じゃないか」と言う。手がつけられない。

それでもどうやら少しは歩けるようになって、退院した。

それからも、一進一退が続く。

姉は、姑が糖尿病なのだった。舅のほうは、ずっと前に肺ガンで亡くなっている。

「私は、うちのおばあちゃんには、実家の両親と同じときには病気にならないでね、って言ってあるのよ」

「そんなことを言ってもね。おばあちゃんも病気になりたいわけではないでしょうし」

それでも姉の長女がよい子で、家庭の仕事をしてくれるので、姉は助かっていた。長女は家庭的な子だが、縁に恵まれない。自分から積極的に結婚に乗り出していこうとはしない。次女は、社交的で、ボーイフレンドも多い。長男の鉄五郎は、早くに結婚して、子供も作っていた。姉も、名古屋に嫁した当初は、うちとは随分違う家で、苦労もしたらしいが、子供が三人になった頃には、主婦権を獲得し、積極的に活動していた。

「おばあちゃんは、台所仕事はしないことになっているの」
「どうして？　危ないの？」
「危ないよ。もう年だもん」
　姉と長女とで、姑の糖尿病食も作ってやっているようだ。
　社交的な姉は、民生委員になって、地域のボランティアもしている。
　妹は、来てくれるには来てくれるのだが、いつも、原稿書きに追われているらしく、原稿用紙とペンで書き物をしている。
「美代ちゃん、パソコンを買ったら？　あんたの原稿もメールですぐ送れるよ」
「そんなこと言わないでよ。時間がなくて、パソコンの勉強もできないんだから」
「あ、そう」
　私は、着実に自分の仕事をこなしている妹が、うらやましかった。

　父は、何度も発作を起こす。そのたびに入院騒ぎになる。が、母は、父が入院すると、うれしいのだ。
「私ももう年で、老々介護なんて、つらくて」とぼやく。「病人と介護人とが共倒れになってしまうのが、一番いけないんだ」
「あら、それは一番いいことなんじゃない？」
　夫婦共倒れになったら、死に別れにならないで、いいではないか。でも、そう言ったら、母はとても嫌な顔をした。
　母は、父が亡くなっても、自分は生き続けたいのだった。
　病院にばかり入院していて、父はトイレに歩いていけないようになってしまった。病院では紙おむつを当てて、そこに用をたさせる。いちいちトイレまで連れて行ってくれない。そんな面倒なことはしていられないのだ。何度も入院したために、父は、トイレに行くことができなくなった。
　今度父が退院してきたら、私たちが紙おむつの世話をしなければならない。それは、考えても大変なことだった。母は、それが嫌で、父を特別養護老人ホームに入れようとした。「そんなところに行くのは嫌だ」と父が拒否する。
　特別養護老人ホームは、定員いっぱいで、何年も待たなければ入れない。が、始めから嫌がっている父を、本人の意思に反して強制的に入れることはできない、と市役所の人に言われた。
　それならば、と老人病院を探す母。そこは月に三十五万円もかかると言われて、
「パパの年金だけではとてもまかないきれないから、子供たちからお金を取ろう」と母は計画する。
　私は、父をホームや病院に預けようとする母が、とても嫌だった。

## （１６）父母の死

　千葉市内に、老人保健施設を隣に付属させている病院があって、父はその病院と老人保健施設とを行ったり来たりしていた。老人保健施設は、自宅に帰れるようにリハビリするのが目標だったが、母は父を家に引き取るつもりがなかった。
　ある日、私は施設に父を見舞いに行って、車椅子を押して施設内を散歩させていた。
「パパ、ここならお風呂にも入れてもらえるよ」と父を励ます。病院には介護用入浴施設がなく、父は何ヵ月もお風呂に入れてもらえなかったのだ。
「そうですね、谷口さん、今度、お風呂に入りましょうね」と職員の人も言ってくれたが、そのとき父は、「難儀だあ……」とつぶやいて意識を失ってしまった。
　職員があわてて、隣の病院に入院させた。
　その病院で、父は発作はおさまったが、肺炎を併発したのだった。院内感染だったかどうかはわからない。老人の肺炎は命取りだった。
　母と私とは、かわるがわる、毎日、病院へ父の見舞いに通った。しかし、母は、その毎日が耐えられないのだった。
「こっちが病気になりそうなんだよ。気晴らしがしたいんだよ」と訴える。「奥軽井沢へ行って、いい空気が吸いたくて」
　ちょうど八月のお盆休みが来ていた。夫の会社が休みなので、私は夫に頼んで、車を運転してもらい、母と三人で奥軽井沢の別荘に出かけた。
　山のさわやかな空気を吸って、母は一息ついたようだった。ところが、翌夕、妹から電話がかかって来た。
「病院から緊急電話があったの。パパの容態が悪いから、すぐに来てって。名古屋のお姉ちゃんにも知らせたわ」
　深夜、私たちは車で千葉へ向った。途中、間の悪いことに車が側溝に落ちてしまい……どうなることかと思ったが、通りかかった親切な人が、夫と二人で力を合わせ、車を側溝から出してくれた。
　翌朝早く、病院に着いた。姉妹も来ていた。
　昏々と眠り続ける父を前に、医師が言った。「もう、一つあるとすれば、気管切開して人工呼吸器をつけるしかありません。どうしますか？」
「お願いします」と母が言う。
　私は少しあわてた。「そうやって、よくなるんですか？」
「いや、よくなるということは、あまりありませんが」
「どれくらいもつんですか？」
「半年もった例もあります」
　一日一万円の個室で、半年間死を待つ……私は親不孝なことにお金の計算などした。いったいどれくらいかかるのだろう？
　姉が言った。「それは、相談してみます」

だが、相談する暇はなかった。
私は「ここは私が見ているから」と言って、皆を家に帰らせた。そして、父のそばに付き添っていた。しかし、父の身体につながれている心電図計の図形が波を打たず、平らになったのはなぜなのか……これはいったいどういうことだろう、とバカな私は不審に思っていた。
看護婦が入ってきて、「呼吸していない！」と言って、医師を呼びに行った。
そうか、心電図が平らだということは呼吸していないということなのか……とわかったが、私はまだ、事態がのみこめずにいた。
あわててやってきた医師は、心臓マッサージをしてくれたが……。
「ご家族を呼んでください」と言われ、私が家に電話して、母や姉たちが駆けつけてきた。医師はまだ心臓マッサージを続けている。もう四十五分間もたっている。
「ありがとうございました、もうけっこうです」と姉が言った。父の死亡が確定した。平成七年（一九九五年）八月十三日午後二時十五分、八十九歳であった。
「パパ、もう、難儀ことはありませんよ……」と母が父の身体をさすりながら、つぶやいた。
それからはあわただしい葬儀の日が続く。始め、葬儀社は、ちょうどお盆なので僧侶がいないかもしれない、十五日過ぎるまで待たなければならないかもしれない、と言ったが、運よく僧侶は見つかった。田舎の寺の僧侶に来てもらうことは、問題外だった。田舎の先祖代々の墓に葬ることも、問題外だった。千葉で葬儀をして、千葉の墓に葬った。この墓は、父が生前、買っておいたものである。

父の葬儀が済んだ頃、母は病院から帰ってきて、暗い顔をしてぶつぶつ言っていた。「肺ガンか、結核なんだって」
「先生にそう言われたの？」
「うん、でも、あたしは気管支ファイバーは、つらい検査だから嫌だ」
母は嫌がったが、医師はどうしても気管支ファイバーをしなければならないと、母を説得した。一日検査入院して、麻酔をかけてやるという。
「嫌なんだよ、あたしは……でも、先生が、どうしてもしなければって言うの……」と母はぶつぶつ言っていた。
検査の終わった日、私は母を迎えに病院へ行った。病室で待っていると、母が麻酔で眠ったまま、タンカで運ばれてきた。苦しそうに眠っていて、いかにも老いさらばえた八十代の老婆だな、と見えた。いつもは母は若々しく見えたのだ。
母の目が覚めてから、タクシーで家に連れて帰った。
検査結果は母と病院に聞きに行った。
「肺ガンです」と医師は母に告知した。
「しかし、もうお年ですから、私はあなたの身体をいじりたくないんです。何もしたくないんです。あなたは何をしてほしいんですか？」
母は「もう手術は嫌だ。手術するといわれたら、断る」つもりでいた。が、医師は、手術だけでなく、抗ガン剤も放射線治療もしたくないという。もう八十歳を越えているから、という。

母はゲルソン療法と、川越のＯ先生の診察を受けたい、と言った。Ｏ先生は、西洋医学だけでなく、東洋医学やそのほかの代替療法にくわしい。ゲルソン療法は、アメリカの民間療法の一つで、玄米菜食を基本にしている。母はそれにかけることにした。病院の医師もそれを認めてくれた。
「ゲルソン療法のことは私は知りませんが、もう、何でもお好きなものを召し上がっていいと思いますよ。後、一年ですね。一年後にあなたはここに来るでしょう。それまで、好きなように暮らしていていいですよ」
何ということを言う医師だろう、と私は不満だった。最悪、肺ガンだとわかっても何もしないなら、なんであんなに母の嫌がる検査を無理にしたんだろう、と思った。
川越のＯ先生の所まで、私は母について行った。Ｏ先生は、ガン治療で有名な方である。患者が多く、診てもらう日を予約しなければならない。やっと予約した日が来て、私たちは三時間かけて川越に行った。
先生は、丸顔の、優しそうな方だった。「布袋(ほてい)様だよ」と後で母が言った。ほんとうに、布袋様のようなお顔なのだ。
その先生に、母は「私はガンは克服しました」と言った。母は、ゲルソン療法やその他の代替療法の本を読むうちに、自分はガンは克服した、と思うようになっていた。
Ｏ先生は、母に、漢方薬を処方してくれた。中国から取り寄せた、保険のきかない漢方の薬草である。それを煎じて飲む。
母は、そのほか、無農薬栽培をしている農場から有機野菜を買い、無農薬玄米も買って、玄米菜食を実践した。にんじんと青菜のジュースを作って飲む。母がそれ専用のジューサーを買ったので、私が毎日、ジュースを作ってやった。
母は背中の痛みを訴えるようになった。が、依然として、自分はガンは克服した、と言っていた。
「背中が痛い……」と母は近所の外科や整形外科にあちこち行って、訴えた。相手にしてくれない先生もいたし、簡単に痛み止めをくれる先生もいた。
「近所の高橋外科へ行って、背中が痛いって言ったらね、すぐに薬をくれたよ。なんだねえ、いつもの病院なら、難しい検査ばっかりして、その結果、暗い顔で、ガンだって言うのに。こんなこともあるんだねえ、八十四歳にもなって、こんなこともあるって、知らなかったよ。不思議だねえ……」と母は笑いながら、私に同意を求めるように言った。その痛み止めの薬は、効かなかった。
私も、ガンになった。子宮ガンの定期健診に行った産婦人科で、「もっと大きい病院に行ってください」と言われ、市立病院に行き、そこで子宮体ガンを告知された。すぐに手術しなければならない。
母を一人残して入院するのは、不安だった。母の食事は毎日私が作っていたのである。私がいなくなって、母が困らないか？　妹に頼んでみた。「ママがうちに来てくれればいいのに」と妹は言う。姉は「ママが名古屋に来てくれれば、面倒をみてあげられる」と言った。母の妹である叔母も、「姉さんがうちに来てくれれば面倒みるのに」と言う。が、母は千葉の家から離れたく

ないという。しかたないか……結局、妹が一日おきに家に来てくれ、なんとかなった。
　が、私の入院中に、母は末期ガンになってしまい、いつもの病院に入院することになった。「あなたは一年後にここに来る」と言われた通り、そこへ入院したのである。平成十年(一九九八年)九月のことである。市立病院を退院した私は、母の見舞いに行った。姉も来てくれた。
　母は一時もちなおしたが、よい状態は長く続かず、結局、モルヒネで痛みを和らげることしかできなかった。私たちは毎日母の見舞いに行ったが、母はだんだんもうろうとしてきて、何もわからないような状態になってしまった。
　夜、病院から電話が来た。母が危篤だから、来るように、という。私は妹と姉に電話した。市川から妹が、名古屋から姉が、来てくれた。
　その日一日もちなおして、私たちは胸をなでおろした。
姉と、妹と、私、それに私の夫、四人で母に付き添っていたが、夜になったので、姉だけ残して、私たちは家に帰った。
家に帰ったとたんに、姉から電話が来た。当時、携帯電話はまだ存在していない。
「ママが亡くなった……」
「えっ？」
「あのときが、最後だったんだね、あんたたちが帰ってすぐ、いけなくなって……」
母は静かに息をひきとったという。
　ガンは克服した、と信じていた母は、末期ガンになり、どうしてもガンと知らねばならなくて、いったいどう思ったろう？　かわいそうで、聞けなかった。
　父の葬儀のときと同じ葬儀社、同じ僧侶に来てもらい、火葬し、父のと同じ墓に葬った。父の死から、三年ほどたっていた。
　それですべては終わったけれど、父の死も、母の死も、私にはもう一つピンとこなかった。まだ父母がどこかに生きているような気がするのだ。

## （１７）その後の姉妹

　父母の遺産相続は、円満に運べた。まず、父の遺産である父母の住んでいた家は、母のものにした。父に、格別の預貯金はなかった。母の遺したもののうち、千葉の団地の二軒――父母の住んでいた家と、私たち夫婦の住んでいた家――は私のものに、市川市の妹一家が住んでいたマンションは妹のものに、奥軽井沢の別荘は姉のものにした。母の預貯金は、三分の一ずつ三人で分けた。私の取分が家二軒で多いようなのは、私が父母のそばにいて介護を担当したことを姉妹が認めてくれたからである。父母の住んでいた家には、今、息子が住んでいる。
　姉の次女、多美が、結婚することになった。相手は高卒の技術者である。多美が短大を出ているので、姉は大学出と結婚させたかったのかもしれないが、何も言わなかった。姉は結婚も就職もしない長女の和江のことが、心配でしようがないのだ。
「和江ちゃんは、家庭的でいい娘じゃない。少し古風だけれど、結婚したらいい奥さんになると思うよ」
「それが、結婚するまでが問題なのよ。短大を出て就職したのに、すぐ辞めちゃって、家にいるのよ。私は、寿退社でなければダメって言ったのに、聞かないで、ちょっといじめられたくらいで辞めちゃうし」
「縁談はないの？」
「いつか白馬に乗った王子様が現われると思っているのね。少女漫画ばかり読んで、仕事も探そうとしないし、何を勉強するでもなく、嫁にも行かないの」
「結婚だけが人生じゃないでしょ」
「だって、働かないのよ。何か職を得ようと努力しているならいいけれど、それもせずに。漫画に熱中しているから、お前、漫画も読むばかりじゃなくて、自分で描いてみたらって言ってみたけれど、それもしないし。主婦にしかなれない娘が、結婚しないでどうするのよ」
「結婚したり働いたりするのだけが人生じゃないでしょ」
「それなら、漫画に入り浸ってのんべんだらりと暮らすのが、人生なの？」
「いいじゃない、お宅は財産があるんだから、生きていけるでしょ。財産は、橋本家の三人の子で分けるんだから、三分の一は和江ちゃんのものじゃない」
「それでは財産が増えないじゃない。財産がなくなったら、どうするの？」
「和江ちゃんはブランド品をほしがったりしないじゃない。ぜいたくしないから、大丈夫よ。それに、もし万一お金がなくなったら、そのときは和江ちゃんも働くでしょ」
「そのときになったら、掃除婦しか仕事がないじゃない」
「掃除婦でなぜいけないの？　お姉ちゃん、人を差別してはいけないよ」
　私は姉をたしなめたが、なおもあきらめきれない姉は、結婚相談所に行って入会の手続きをして来た。

「ところが、和江が履歴書を書こうとしないのよ。せっかく入会させようとしたのに。十万円も払ったのよ」
「お姉ちゃん、それ、あらかじめ和江ちゃんの承諾を得てから払ったの？」
「ううん、そうじゃないけれど」
「それは無駄遣いね」
　次女の多美は、すぐに相手を見つけて結婚した。私と美代子とは、結婚式に名古屋まで日帰りした。
　帰り道、美代子と四方山話をする。
「谷口家も、正子叔母様も誠叔父様も亡くなって、さびしくなったわね。京子叔母様は不思議と長生きしているけれど。新潟の老人ホームにいるらしいわね。私、小さいとき、京子叔母様が怖かったわ」
「私はもっと小さかったから、ママのいない昼間、京子叔母様が頼りだった」
　そうか。父が「京子も留守番だ」と言っていたように、あのひきこもりの京子叔母も、美代子の学齢前に母が働きに出た、その留守を守ることはできたのか。
「そういうこともあったの。和江ちゃんは、京子叔母様の血を引いているんじゃないかって思うけれどね」
「さあ、それはどうかしら？」
「もっとも、和江ちゃん、家事労働はちゃんとするのね。お姉ちゃんが民生委員をしたり、市議会議員の選挙運動をしたりして、遊びまわっている間、和江ちゃんがきちんと家の仕事をしているのよ。和江ちゃんもよい縁さえあればね」
　父親の豊も、和江が結婚しないと文句ばかり言って、自分で婿を探してきてはくれないのだ。社交的に遊びまわっている姉も、顔が広いはずなのに、婿を探すことができない。
　姉の姑は、孫娘の多美の結婚式に出席するとき、すてきな着物を調達した。が、病気で、姉が着物では介護できないからと、洋服を着るように言った。
「おばあちゃんは残念がっていたけれど、しようがないのよ」
　とうの昔に、橋本家の実権は、姉が握っている。
「おばあちゃんは、力むっていうことができないのよ」と姉は言う。トイレで力むことのできない姑のために、姉は、手に薄いゴム手袋をはめて摘便してやっていた。普通の嫁にはできないことも、心のやさしい姉は、してやっていた。糖尿病の姑のために、糖尿病食も作り、看病していた。
　その姑が、病気が悪化して、腎臓を悪くし、人工透析しなければならなくなった。
「車で行かなければならないのに、私は運転できなくて。和江は免許は持っているんだけれど、運転したがらないのよね。タクシーをつかまえるのもなかなか大変で」と姉は愚痴っていた。
　そんな日が続いて、ある日、姉から電話があった。
「おばあちゃんが亡くなった」
「えっ？」
「透析すればずっと生きられるかと思ったのね。でも、違ってた」

「そう……」
　葬儀には、夫と二人で参加した。
　親戚が大勢集まって、姑を見送る。飼い犬のテツが、皆に相手にしてもらえず、ワンワン吠えていた。
　私が「おじいちゃんって繊細な人だったけれど、自分の気持に繊細で傷つきやすいだけで、人に対する思いやりってあんまりなかったわね」と言うと、姉は、
「うちのおばあちゃんもそういう人だったよ」と言った。
「そう？　姑さんに仕えるのも、大変だったわね。でも、思いやりはいまいちでも、意地悪なところはなかったのね」
「うん。私が、近所からもらった嫁でないことは気に入らなかったようだけれどね」
　姉は、義兄とは、静岡の大学で知合ったのだ。

　妹の姑も、亡くなった。義弟は末っ子なので、妹夫婦は姑とは同居していなかった。
「吉岡の母も亡くなったのよ。葬儀には来なくていいけれど、名前だけ出しておいていいかしら？　香典だけ」
「いいわ、お金は後でそちらに送るから。主人の名前を出しておいて」
「うん。そのうち、香典返しが来るだろうけれど、不審に思わないで、承知しておいてね」
「わかった。これで、私たちの親の世代は、全員亡くなったわけね」
　子供の世代は、どうか？
　妹の一人娘、さち子は、大学を卒業して、外資系の会社に勤めている。これも、まだ結婚していない。娘たちの適齢期神話は、崩れている。
　私の育てた一人息子は、就職もうまくいかず、結婚もうまくいかず……離婚している。孫娘は嫁が連れて出ていったので、私たち夫婦は、孫にも会えない。
　夫も、義兄も、義弟も、それぞれ定年退職した。私と姉とは専業主婦のまま、妹一人、音楽評論家として働いている。
「主人が美代子ちゃんもテレビに出られればいいのに、テレビに出ないって言っているよ」
「テレビに出るって、悪いことをすればテレビに出られるよ」
「作家は、ときどきテレビに出るじゃない」
「有名な人はね」
　吉岡美代子は有名ではないのだ。
　私は、小説を書いている。今、六十代も終わりに近くなって、この年ではもう世に出られないかもしれないが、それでも、こうして書いている。親たちを見送って、今度は自分たちの番が来る。そのときまで、ぎりぎりまで、書いていたい。

了

# ちち・はは

http://p.booklog.jp/book/78654

著者：小城ゆり子
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/youko103/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/78654

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/78654

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ